



発行所 日刊建設工業新聞社
〒108-0021 東京都港区東新橋2-2-10
電話03(3433)7151 https://www.decn.co.jp/
◎日刊建設工業新聞社 2018
〒東京都港区東新橋2-2-10
電話03-3433-7161 mail-ed@decn.co.jp
〒東京都港区東新橋2-2-10
電話03-3433-7152 mail-sa@decn.co.jp
〒東京都港区東新橋2-2-10
電話03-3433-7154 sj-rc@decn.co.jp

THE DAILY ENGINEERING & CONSTRUCTION NEWS

日刊建設工業新聞

2018年(平成30年) 11月6日 火曜日

第19542号

近年の科学技術の進歩は目を見張るものがある。iPS細胞の発見や第113番目の元素の発見など、毎年ノーベル賞の医学や物理、化学などの受賞内容を知るにつけ、改めて科学技術は不可能なものがないのではないかと思ってしまう。

一方、今世紀は巨大災害の世紀に突入して、これまでなかった新しいメカニズムの巨大災害が毎年のように発生している。私たち地震学の門外の者は、これまでなかった自然現象も科学技術の進歩がそのメカニズムを解明して、その克服へ着実に進めていっているものと期待していた。

ところが、東日本大震災以降、地球物理や地震学の第一人者たちが「科学の敗北」と発言し、これまで

明治維新150年と治水の歴史

竹林征三

〈35〉地震学の権威者は「科学の敗北」という

東海地震は予知できるとしていたものが、一転して複雑系の現象なので予知できず、予知研究など一切止めてしまえとなった。自然現象の解明に向けて、自然災害の科学部門だけが、唯一逆方向に舵を切って動きだしているようにみえる。実に奇妙な社会現象である。これまでなかった自然現象を解明するには、科学による知識を得ないと思つたのだ

が、その科学の第一人者が科学の敗北と言っている。科学技術とは何か。科学は何に敗北したのか。東京大学名誉教授で元地震研究所教授の上田誠也氏は著作に「電磁気的地震予知は案外うまくいくかもしれないぞ」と張り切って、国際的な外部評価委員会に評価を受けたのですが、時すでに遅く、その前に「短期予知は不可能」というお国の基本方針が決定しており、われわれの計画は止められてしまいました。『評価がこんな高いのにどうして継続できないのか』と担当官にきくと、『問答無用。あれは科学的評価。われわれは政治的評価をする』とのことで

した。これはわが国の評価システムの汚点となる事件の原義を調べれば、*「separate one thing from another, cut, split」*である。科学(science)とは、連続体の諸事物を同類と異類を見分け、切れ目をいれ、別の壺に入れて、それにふさわしい命名ラベルを貼る。それをどんどん細分化してゆく手法である。科学の「科」は「禾」と「斗」よりなる。「禾」はイネ、穀物のことである。「斗」は一定量を計る器である。穀物を1杯、2杯と計りながら器の中に入れていくことである。穀物をそれぞれ別々の器と分けて入れていくことである。いわば蝸壺(たこつば)に分けて入れていくことである。

英語の「science」の原義を調べれば、*「separate one thing from another, cut, split」*である。科学(science)とは、連続体の諸事物を同類と異類を見分け、切れ目をいれ、別の壺に入れて、それにふさわしい命名ラベルを貼る。それをどんどん細分化してゆく手法である。科学の「科」は「禾」と「斗」よりなる。「禾」はイネ、穀物のことである。「斗」は一定量を計る器である。穀物を1杯、2杯と計りながら器の中に入れていくことである。穀物をそれぞれ別々の器と分けて入れていくことである。いわば蝸壺(たこつば)に分けて入れていくことである。

活字のせいなのだろう。科学とは蝸壺の学問なのである。①同類と異類を仕分けする。②仕分けが同じで仕分けの仕方が異なる。③仕分けの仕方が異なる。④仕分けの仕方が異なる。⑤仕分けの仕方が異なる。

中国では宏観異常現象(生物や大気、地中現象、電波など)を寄せ集めて地震予知に成功しているという。科学教の信者はこのようになことを認めたくない。参考文獻・『物語日本の治水史』鹿島出版会(常葉大学名誉教授、風土工学デザイン研究所会長)

科学的な戒律下で生きびい生活